

明でインパクトがないだろう。外国人の感性に訴える名前を工夫する必要がある。われわれは「ポカリスエット」とか「コココーラ」と聞くと、意味が分からなくてもなんとなく受け入れる習性がある。けれどもよその民族もそうだとは言えない。外国の文学、古典、伝説などの知識をもっと応用した命名を考えたらどうだろう。日本の雅名も、単なるローマ字化ではなく、意識するような教養と工夫が必要である。園芸界で文学者や詩人や歴史家を動員して講習会をやったら、輸出に貢献するのはあるまいか。観察会や勉強会でも、名前の由来についての解説がよくなされるが、解説者が勉強して、もっとレベルアップすればよい。

あちこちに「第V部参照」というような指示があるが、頁の肩の見出しは1～2頁は「前文」、3～4頁は「原則」（この場合I部）、5～53頁は「条」（この場合II部）、54～61頁は「部」（この場合III～VI部）、63～99頁は附録となっていて、慣れないとどこに何があるのかわかりにくい。

付録にはI国際栽培品種登録機関、II種苗登録行政機関、III特定の適用分類群、IVスタンダード標本が保持される場所、のリストがある。IIIを除いてはいずれも欧米の機関が圧倒的である。スタンダード標本が保持される機関は、オーストラリア、カナダ、オランダ、ニュージーランド、南アフリカ、英国、米国のみである。これは意思表示した機関が今のところそれだけだ、ということなので、こういう命名規約の必要性を認識するならば、積極的に意思表示をした上、実績を見せねばならないだろう。言うは易く行は難しである。

国際植物命名規約よりはるかに煩雑で、かつ金銭的利害に影響の大きい国際栽培植物命名規約の和訳に取り組んだ、邦訳委員会のご苦労を多とすると共に、これが広く有効に利用されることを期待する。上記しただけでもわかるように、この命名規約自体がわが国の流通市場に与える影響が少なくないので、その改善に関係者がこぞって取り組む必要があるだろう。（金井弘夫）

□藤木紀之、小澤智夫：琉球列島産植物花粉図鑑。A4。155 pp。2007。¥5,000+税。アクアコーラル企画。ISBN: 978-4-9901917-8-8。

日本植物の花粉は幾瀬により集大成されているが、その発表は1956年であり、まだ電子顕微鏡の時代ではなかったうえ、沖縄県や小笠原諸島は政治的な理由で研究の範囲外だったため、亜熱帯系の植物については材料に乏しいというらみがあった。本書は名古屋大学の拠点形成研究補助金による琉球列島の植生変遷史の基礎研究の成果で、65科117種の花粉が示されている。10～30頁に植物名、方言名、花粉の記述、計測値、資料の採取日付、産地、花期、分布が列記されている。32頁以降は1頁1種ずつ、電顕像、光顕像が原則8枚の写真で示される。植生変遷ばかりでなく、系統や分類の理解の上でも有用な資料である。出版社の連絡先は〒901-宜野湾市 (Tel: , Fax: )。 (金井弘夫)

□小林正明：花からたねへ。A5。247 pp。2007。¥2,500+税。全国農村教育協会。ISBN: 978-4-88137-125-1。

種子散布について分かりやすく書いた本がなかったが、本書は散布体とくに散布の方法について網羅、解説している。第II節の散布の方法についての記述が主体だが、風散布、動物散布、水散布、自力散布のほか、栄養体散布についても章が設けられている。それぞれの章はさらに細分した項目に分けられ、実例とされた植物の花の断面や散布体のカラー写真が、理解を助けている。本書のもう一つの特色は、花のどの部分が散布体のどの部分に対応しているかに注意を払って説明している点で、第I節35頁にわたって花から種子への変化の様相が解説されているうえ、目次の最後に「もうひとつの目次」として、花器官のどれが散布体のどの器官に対応するか、および散布法との関係が表として示されている。写真は接写が主体で、ふだんあまり注目しない花や果実や種子の細部を、あらためてよく観察理解する助けになる。授業にも自然観察にも役に立つ本である。（金井弘夫）